

(資料)

北方藤樹学から考える人づくりと地域の未来：座談会記録

佐々木 純一郎[※]

Junichiro SASAKI

◎日 時：2024年11月21日（木）、15：00-17：00

◎場 所：喜多方市役所 大会議室

◎出席者

○藤の樹会

会 長・鈴木充正氏、副会長・菅井一良氏、事務局長・沢井清英氏、
幹 事・新田義則氏 会 員・小荒井きぬ子氏

○喜多方市教育委員会

生涯学習課 参事兼課長・佐藤洋氏、文化課 主幹・片岡洋氏、文化課 主査・蓮沼優介氏

○司 会

弘前大学 佐々木純一郎

◎はじめに：藤の樹会・発足の経緯と「北方藤樹学（きたかたとうじゅがく）」について

白井英男・喜多方市長の時代に、藤樹学に注目した勉強会「藤の樹会」が発足した。

家庭での躾や人間の生き方の基礎に、もう一度光を当てようということだったという。

勉強会には、市職員、教員、商業者や農家など市民が集まった。

藤樹学は市民にとって近寄り難かったが、市文化財保護審議会の委員を歴任していた伊藤豊松先生の専門的な解釈により助けていただいたという。

勉強会・藤の樹会が長続きした要因は、市民の皆さんが藤樹学を見つめ直し、生活に活かしたためである。

当時は、行政の補助もあり、カラー印刷のポスターを作成していた。

かつて福島県の社会教育事業に採択されたこともある。

現在の会員は36人、毎月一回、数人が集まり「清座」を開催している（コロナの時期を除く）。

なお喜多方市教育委員会が実施したアンケートの結果によれば、中江藤樹を含む先人を紹介した「喜多方市人づくりの指針」（後掲）は、保護者、児童・生徒に概ね理解されているという。

[※] ささき じゅんいちろう 弘前大学大学院地域社会研究科 教授

喜多方市民が藤樹学を常に意識しているわけではないが、代々その教えが今も継承されている。

喜多方の人々の優しさ、積極性そして助け合いにそれが反映されているという。

今回は、藤の樹会のメンバーに集まっていただき、喜多方に根付いた「北方藤樹学から考える人づくりと地域の未来」をテーマとした座談会を開催した。

以下は、その座談会記録である。



写真1 藤の樹会の出席者
(左から)

会長・鈴木充正氏、副会長・菅井一良氏、事務局長・沢井清英氏、会員・小荒井きぬ子氏、
幹事・新田義則氏



写真2 喜多方市教育委員会の出席者
(右から)生涯学習課 参事兼課長・佐藤洋氏
文化課 主幹・片岡洋氏、文化課 主査・蓮沼優介氏
(藤の樹会 幹事・新田義則氏、再掲)

◎座談会記録

司会（佐々木）

弘前大学の佐々木です。私は地域ブランドの研究をしています。2007年2月、喜多方市観光交流課に喜多方ラーメンの取材にいきました。五十嵐さんが担当課長でした。取材帰りに、商店街を歩いていたところ、藤の樹会のポスターを発見しました。当時泊まった旅館・俵屋の女将さんに尋ねたところ、旦那さん（田原芳明さん）が藤樹学を学んでいるとのことでした。田原さんを通じて、甲斐本家・甲斐岳夫さんや大和川酒造・佐藤彌右衛門さんをご紹介します。

当時、喜多方市教育委員会も訪問取材しました。また伊藤豊松先生の講演会に参加し、豊松先生と名刺交換もしました。その後2011年の東京電力の原発事故があり、しばらくは地域ブランドの取材が中断しました。

近年、藤樹学が大事だと再認識し、主に喜多方観光物産協会・会長の樟山敬一さんを訪問して、喜多方の藤樹学が支えてきた観光地域づくりの話取材しております。そして今年9月に沢井様と蓮沼様にご相談したところ、今日の座談会となりました。

お手元の資料にあるように、皆さんも関心をお持ちの「北方藤樹学から考える人づくりと地域の未来」をテーマにしたいと存じます。そこで四つの項目について、第一に、自己紹介としてなぜ北方藤樹学に関心をもったのか。第二に、これまでに北方藤樹学に支えられたあるいは助けられた思い出。第三に、これからの世代に伝えたい言葉。そして最後に自由意見ということで、合計2時間ぐらいを考えております。よろしくお願いいたします。

それでは発言の順番は、会長の鈴木様から始めていただき、皆さん5人が終了した後、二番目の項目に進みたいと思います。ある程度まとまってから質疑応答をしたいと思います。まずは鈴木会長から、なぜ北方藤樹学に関心を持たれたのかをお話しいただけないでしょうか。

I. 自己紹介となぜ北方藤樹学に関心をもったのか

鈴木

藤の樹会をご存知だと思います。その会長をおおせつかっている鈴木です。喜多方市教育委員会にかつてお世話になったものです。その当時、市の教育委員会で「喜多方市人づくり指針」を作成することになり、その委員長を兼ねていました。作成にあたって元にしたのが藤樹学の教えです。人づくりの指針は学校教育や一般の人たちによく周知し、努力してもらうというものです。今お配りしておりますのは、子供を対象に作成した、子供たちの目指す姿「なかよくたくましく生きる」というものです。作成にあたっては喜多方らしさと精神的なものが必要ですから、やはり中江藤樹の教えの他、本市の歴史に大きな足跡を残した瓜生岩子と蓮沼門三の生き方や教えをとり入れました。この先人の教えを元にして人づくり指針を作成しました。作成にあたっては、今ここにおられる隣の菅井さん、それから沢井さんに作成委員として色々ご協力いただき、なんとか形を整えることができました。この作成にあたっての学習を通し、藤樹学の教えの奥深さを、改めて深く知りました。

司会

最初は市の教育委員会からの働きかけがあり、そこにご参画なさった時に、今にいたるさまざまな指針を作ったということですね。ありがとうございます。次に副会長の菅井様。きっかけについて、補足なども含めてお願いします。

菅井

ありがとうございます。私は（会津）若松市の教育委員会に勤めているときに、今の教科書に載っています「あいづっこ宣言」の作成にかかわったものですから、日新館とか色々調べたわけなのです

ね。その後喜多方市教育委員会の学校教育課長として赴任しました。鈴木充正先生が教育長だったんですけれども、その時に隣の沢井さんが生涯学習課長さんで、藤の樹会を一生懸命やっておられて誘われ、参加しました。その時の講座の中での「清座」、あれがああ江戸時代の身分制度がカッコリした中で、しかもそのなかの約束事、ほかの人の意見をよく聞くこととか自分の意見を勝手に押しつけてはダメだとか、謙虚であることとかいう約束事があって、なんでこんなことが江戸時代にできたんだろうと興味を持ちました。そしてこの藤樹学を知れば、若松のあいづっこ宣言とは全然立つ位置が違うのだということがわかりました。私、喜多方の学校をぐるっと回った時に、ある校長先生が会津は一つなんだからあいづっこ宣言を子供たちにとって盛んに言っていたんですが、いや喜多方は違うぞってということで、これをきっかけにして郷土の歴史なり、藤樹学を調べるきっかけになったっていうのが今の起こりであります。

司会

若松の教育委員会から喜多方に移られたのは何年ぐらい前の話でしょうか？

菅井

平成15（2003）年頃です。すでに藤樹学を一生懸命やってらっしゃいました。あの時確か伊藤豊松先生を中心にして、人づくり大学ということで、応用編、基礎編、それからセミナーと合わせて年16回ほど開催されていました。それに何回か参加させていただいた記憶があります。

司会

活発な頃の活動をご存知だということですね。

菅井

それからもう一度わたしは現場におり、更にまた若松にいく機会があり、そこからまた喜多方に戻ってきたんです。その時に教育基本法がいろいろ改正されました。生涯学習とか家庭教育とか学校・家庭・地域の連携とか伝統文化という新しく項目もできました。そんなとき東日本大震災がありました。家庭とか、隣近所の人間関係の絆を深めましょう、助け合いですね、そのような事が盛んに見直された時期だったんです。

2011年、喜多方市が合併して五年目になりました。それぞれの個性がすごく強い市町村が合併したと思います。それでなんとかスタンダードな教えが欲しいということで、今の人づくり指針の策定に至ったわけです。その時に喜多方で200年以上前の江戸時代から、ここで学ばれた藤樹学が基本だろうと。私は熱塩出身ですから、瓜生岩子刀自が遊んだ庭で私も一緒に遊ばせてもらいました。時代が違うんですけど、そこで和尚さんの話をいろいろ聞く機会もありました。そしたら藤樹学と禅宗なり宗教の教えと意外と似ているものがある。だったらこれはつながると思ひまして、そして喜多方市に再度赴任した時にこの人づくり指針の策定をお願いし、その時にいろいろまとめを鈴木充正先生にお願いしたという経緯がございます。

人づくりの指針といいますか、これは沢井課長さんの時代に藤樹学をもとにして、喜多方市の合併前に一度作られているんです。私その時、これは多分このままだと市民憲章のように壁に掛けられて埃になっちゃうなっていう感じがしたんです。どうしたらみんなに知ってもらえるか考えた時に、やっぱり藤樹学の中身は生き方の問題ですから。それをそのまま言葉にするとかなり難しくなります。ですから平易な言葉で子供でも唱えられるようなものにしていかないと、なかなか皆さんにわかってもらえない。

その唱える中身ですが、何をいちばんその元にしてるかってことが大事だと思うんです。それを瓜生岩子刀自や喜多方の名誉市民第一号の蓮沼門三先生の教えを元にすれば絆だとか共助だとか人への優しさとかが打ち出せるのではないかということで、偉人の2人と藤樹学をセットにしてお願いしたということです。

司会

若松の視点と比較しながらということで、なかなか面白い視点が見えたということですね。それで

は沢井様いかがでございますか。

沢井

さきほど鈴木会長がお話しなされた通りです。喜多方市教育委員会で生涯学習を担当していました。今日も佐藤課長がきています。中心たる骨格は人づくりであるという意識で仕事をしていたわけです。生涯学習の分野は、文化、体育、スポーツ関係、大変広い窓口だったので、いろんな方々とお付き合いがありました。

大変お世話になった伊藤豊松先生とか、川口芳昭先生にいろんなご指導をいただきました。特に豊松先生には、人づくりというのはきちんとしてはだめだと言われました。豊松先生もずっと前から藤樹学の研究をされていました。これがやっぱり人づくりの基本になるのではないかと、ことあるごとに話していました。人づくりの指針ができる前、新しく白井市長になり、人づくりの指針を作ろうということになり、いよいよ本格的に藤樹学を基本とした人づくりの指針の作成に取り掛かりました。

当時は合併前で、旧喜多方市だけの指針でした。菅井副会長から合併後の新しい喜多方市のリニューアル版ができて現在に至っています。そのきっかけとして、伊藤豊松先生の影響が、非常に大きかったと思っています。いかんせん、豊松先生も川口先生もお亡くなりになってしまいました。

司会

伊藤豊松先生と白井市長は、藤樹学について話し合っていたということですね。

それでは新田さん、お願いします。

新田

喜多方市に大きな墓地公園があり、それを作ったのが当時の唐橋東（からはしあずま）革新市長です。墓地公園をあそこに持ってきたのも、その下に素晴らしい先人の学問の聖地のお墓があるんだと、教育の町として喜多方を全国に知らしめるために、あの場所を墓地公園に選んだ。素晴らしい人たちが祀られていて喜多方は教育の町だということを何度も話していました。当時、自分はまだ中学生だったのでよくわからないで話だけ聞いたのですが、その後に白井市長が全国藤樹学のサミットを喜多方でやりたいといわれた時に、ちょうど伊藤豊松先生とジョイントしてやる方向の話をたまたま聞きました。

江戸時代、素晴らしい我々の先人がわざわざ京都に行って留学して、帰ってきてこの喜多方の地に合うような学問に皆さんが実践してきた。それが明治になって衰退し、戦後になってさらに衰退した。伊藤豊松先生が発掘され、大事な学問だからということで新聞の月刊の折込に、朱子学の解説、陽明学の解説、さらに藤樹学の解説という文章でした。非常に難解な文章を見るたびに眠たくなって勉強が続きませんでした。興味はありました。

やがて沢井さんにお会いし、市庁内で人間づくりと、ひとづくりのために藤樹学をもう一回勉強させたい。市職員にまず勉強させて、それが成功したら市民講座に持っていきたい。どうだ新田くん一緒にやらないかと誘われた。私も沢井さんの本当に真っすぐな気持ちが、喜多方の財産だからという気持ちになりました。そこでお手伝いさせてくださいと、この会に入らせてもらいました。

司会

全国藤樹学サミットの話がでましたが、実際に開催されたのですか？

新田

できなかった。私とその学んだ中で一番大事にしているのは「惻隱の情（そくいんのじょう）」。人の心に寄り添って痛みに寄り添って共にその痛みに涙し喜び共に味わってお互いに助け合う。これが親孝行の孝にもつながる。自分のことを超えて人のためにも自分が何か役立つというのを一番選べるような生き方をしたい。あとは人の心が分かたらおのずと行動ができるので「時中の妙（じちゅうのみょう）」。もっともその時に、最もふさわしい言葉と行動、これができるような人間になりたいと学びました。

私、農家ですが、歌謡曲が好きでカラオケが好きで県歌謡協会に所属して教師をしておりますが、やっぱり一人一人の個性を生かした指導を心がけるというのを藤樹学から学びました。一人一人が輝かないと。誰しも天から授かった能力を発揮することに生まれた価値があるので、自分がそれぞれに自分の個性が花開くような指導やアドバイスをしたい、していかないといけないという戒めにもなっています。よろしくお願いします。

司会

それではお待たせしました、小荒井様。

小荒井

私は藤の樹会2年生の小荒井きぬ子と申します。職業は美容業、美容師です。7年前から私どもはキリスト教の集会を自宅にて毎週開催しているクリスチャンです。私が藤樹学に関心を持ったのは6年前になります。大和川酒蔵さんの会場で、『中江藤樹の心学と会津喜多方』の著者の吉田公平氏が講演に来られた時でした。その頃藤樹学の事は何も知りませんでしたが、沢井さんの妹さんや2～3人の方の情報を小耳にしていって、日曜日の午後、礼拝の後に集会に集った皆様と、「藤樹学ってなんだか分からないけど、何人かの方々が良い話だと、いっているから、行ってみましょう！」の乗りで行ったのが藤樹学との出会いでした。後で知った事ですが、藤樹学はどの宗教も問わない、心の奥底を探究する学問と聞きました。その講演会は正直、内容は良く分からなかったのですが、今の時代に必要なメッセージが語られている事だけは感じました。仕事や生活・家庭4人の子供を授かり育てる親としても、今の時代はとても生きづらい複雑な時代で、心病む方々の多い時代に、人と人との絆や、人を尊ぶ心を大切にする教えの藤樹学はとても魅力的な学びであると素直に心に落ちました。それは私どもが日頃から聖書に聴く教えの根幹の愛が語られていたことです。その日に中江藤樹という人に出会った繋がり、陽明学の孔子の先には聖書があるのでは？と探求心が湧いたことを昨日の事の様に思い出します。沢井さんとは、その講演会から妹さんとの繋がりもあり、時々藤樹会情報をお聞きしていました。総会参加までは、一步踏み出せないまま、コロナ禍に入り藤の樹会も、活動を自粛せざるをえない状況のようでした。コロナに翻弄されながらも、鈴木会長さん沢井事務局長さんたちは藤樹の火を絶やすことなく動き出し、総会に私も呼んでいただきました。その時の議題は、藤樹先生の生まれ故郷の滋賀県高島市訪問・琵琶湖周辺の旅行計画でした。私は自営の仕事柄、旅行に縁のない者でしたので、「京都観光か、羨ましいな」の思いで、沢井さんの旅行説明を聞いていました。沢井さんの、皆さんを藤樹先生の生誕の地にお連れしたいとの熱い思いと、流石なのは、何をやるのも楽しく、前向きの姿勢や言葉も行動も藤樹先生を生きている人のイメージがありました。頼もしく、周りの方々に信頼厚い、その沢井さんの誘う旅行なら行く価値ありだろうと、説明が終わるころには、滋賀京都方面の旅行に行く決めていました。仕事のことも考えずに。そして家に帰り直ぐに、夫にも11月藤樹先生の生誕地お墓参り旅行に二人で参加します！行くからね！と、いってしまいました。そこで、今年から夫も藤の樹会の会員となり、愛媛の大洲市に藤の樹会員として二人で参加させて頂きました。今年の大洲での特記する出来事は、大洲市教育委員会・藤樹学課の堀井先生が説明された、大洲における藤樹先生景仰の足跡、大洲藤樹会について令和6年度の運営並びに行事一覧。この小冊子に出会い、大洲市がいかに中江藤樹先生を現代に継承しようと働かれている事。このことは今の問題・課題の多い時代に教育現場での助けになる。道徳の学びへの活用は尊いと感じました。また堀井先生との会話から、『中江藤樹の生涯と思想』藤樹会入門等々の著者が小出哲夫神父という方であり、キリスト教にも繋がる場所があるかも…その様な会話に、さらに藤樹学に興味と関心をもつ事となりました。

Ⅱ. これまでに北方藤樹学に支えられたあるいは助けられた思い出

司会

元氣いっぱい頼もしいです。次に二巡目になります。今きっかけをお話いただいたわけですが、人生には、山あり谷あり厳しいところがある中で、藤樹学を学んで良かったことですね。藤樹学があったからこそ今があるんだというところは、会長さんいかがですか？これまでの人生を振り返ってみて藤樹学に出会って良かったという思い出はありますか？

鈴木

はい。人が生きていく上で一番基本になる大切な教え・精神ですね。かつて江戸時代末期から、明治初期にかけてですが、喜多方の多くの人たちが藤樹学の教えを学んだといわれています。今に生きるわたしたちも、その精神に戻らなければならないものが多々あります。そういう内容が深くこめられていると思っているので、何かにつけて心の支えになっていると私は思っています。

喜多方の人は、人が良いとか思いやりがあるとか、よく言われるんですが、やはり藤樹学の教えが広く影響しているのではないかと思います。藤樹学の教えを私が感動した以上に、最初に心を惹かれて喜多方に伝えた矢部惣四郎という人が、京都まで行って淵岡山という人と出会って、藤樹学を学び、心躍らせて喜多方に戻ってきたんです。その熱意とか情熱とか、そういうものに非常に心惹かれました。その藤樹学を矢部惣四郎はじめ喜多方に持ち込んだ先人の墓が1箇所に集まっているところがあります、バラバラではないんです。喜多方の北よりの山のふもとにある上の山墓地です。毎年、私たち会員が墓掃除しています。その時もやはり当時の人たちの思い、努力、熱意といったものを非常に感じます。これからも大切にしていかなきゃならないと感じています。

司会

お墓には9月、沢井様に連れて行ってもらいました。結構広いところに並んでいますね。ありがとうございます。それでは菅井様。

菅井

一つは性善説に基づいて、心の中身を捉える捉え方ってのが、中江藤樹はすごくいいなあと思ったことが実はあったんです。今私、教育相談の中で家族療法に興味があり、ちょっと調べた事があったのです。その中でいろいろな問題行動を示す子供は、その子供が問題じゃなくて、それは家族なりその集団の問題を代表して表現しているという捉え方です。最近では、今の新しい国の教育方針の中で、ウェルビーイングという考え方があります。個人の幸せというのは、身体的にも精神的にも社会的にも満たされた状態に持って行くことがウェルビーイング、ウィンウィンの関係ですね。そういうことの中身が、実は中江藤樹の目指したことなんじゃないかということもあります。これもすごく共通して、だから古くて新しい現象だということを感じました。この資料ですけど、私が喜多方の教育委員会にお世話になった時、学校とか保護者のかたと話している時、正直言って藤樹学を知っている人はいませんでした。瓜生岩子刀自は熱塩地区では知っていました。ほかの方に行くとチラホラでした。蓮沼門三先生は山都の本当にある部分だけとかですね。喜多方にこのような素晴らしい方がいらっしゃるのに、何でこれがこう他に広がらないだろうと考えた時に、これをなんとか一つにまとめて、その根幹には藤樹の教えがあるということを知ってもらいたいとの思いから、この人づくり指針が始まったのです。今、子供達は「なかくタイム」ということで人の良さを見つめましょうという運動が、各小学校で実践されています。公民館では、自分のところの歴史を調べましょう。そこから子供たちに伝えていきましょうというのは、いろんな公民館で行われています。このように広がりつつあるというのを、今、私はとてもうれしく捉えてるところです。

司会

複雑な問題はあるわけですが、それをもう一度基本に立ち戻って考える時に中江藤樹の考え方がヒントになると言うことですね。ありがとうございます。それでは沢井さんはいかがでございます

か。お仕事として藤樹学に携わったことも多いかと思うんですが、個人としての思い出があればお願いしたいです。

沢井

私の生き方そのものがですね、前向きに生きたい。それと同じことなんですけど積極性ですね。そしてみんなの話を聞いて、自分の話をする「清座」、そういうことで私は今藤樹学をやってきました。特に私の現役時代、先ほども話したんですけど人づくり指針のできる前から、生涯学習課の基本っていうのは一つです。今の佐藤課長も、ご存知のように。やっぱり基本となるのは藤樹学になるのじゃないか。そういう文化、体育、社会教育、公民館の活動、全てが藤樹学に支えられてきたような感じがします。そして今現在、その考え方を自らの生活に生かすよう心がけています。

司会

自分の生き方そのものが藤樹学に近いというか、あえて藤樹の言葉を使わなくても、実践しているところがあるわけですね。

沢井

昨日も更生保護女性の会で藤樹のお話させていただきました。年配の方々が多かったのですが、50人くらいの聴衆のうち、中江藤樹を知っていたのは3人でした。私、皆さんの活動の基本となるものは藤樹学の教えがあるのではないですかと逆に問いかけたんです。うなづいている方もいらっしゃいました。全ての生活の面で、藤樹学の考えがそれぞれあるのではないか。行政もまさにその通りで、退職してからそれは強く感じています。

司会

はい、ありがとうございます。これまでに藤樹学に支えられた思い出を伺っております。新田様いかがですか。

新田

明治8年にこの地域は、北方という地名を喜多方に改めました。誰がどう議論したのかわかっていません。説明の中には縁起の良いというのがあります。支配する側と支配される側という封建制度からの解放、ということでこの地域に根ざした肝煎（きもいり）・各地区の区長たちが集まって、会津藩が無くなり、リーダー不在の中、これからどうやってこの地域を残し、守っていくんだろうかと議論して喜多方になったのではないかと。喜多方事件といわれる自由民権運動もあった。喜びの多い地域には、自分たちの大好きなこの土地、天災が少ないこの会津に根ざして何百年も残ってきた人たちがふるさとを守りたいという思いがあったのではないかと。私、稲作農家をやっています。土地をやっぱり守っていく、先祖がやってきたことを守っていく、新田家の血筋を伝えていく役割があるので、うちの先人も学んだであろう藤樹学を後世に伝えたい。

真ん中には親孝行の孝がある。先人に対する孝、それから子供、孫、末代たちに対する孝。そして地域に対する孝。生きている間は輝いていきたい。人の役に立ちたい。喜多方に生まれてよかったというのが私の考えです。

司会

古い歴史も含めてそこを心の支えにしたいということですね。ありがとうございます。それでは小荒井さん。

小荒井

今の新田さんの話をお聞きしながら、私が今手にしている『北方の藤樹学』。これは藤の樹会資料ですが、この北方の地名を記した藤樹学の資料に改めて、歴史的に喜多方の地に息づいてきた教えであると思いを新たにします、この何冊かの資料は、会員の皆様ご存じの斎藤マサ子さんより、譲り受けた本です。新田さんのお身内からの受け継ぎもあり、またいろんな人のつながりから、私の手元に、届けられた。斎藤マサ子さんの藤樹学への思いを繋ぐと言うロマンの様な思いを感じます。斎藤さんから、「更生保護女性会の会合にて沢井さんのお話があるのよ、藤樹学をベースに毎回お話してくだ

さるのです」と伺い、前にも史談会など、折ある度に沢井さんは、藤樹学を携えて教えを広めようと、沢井さんの持論「いつも行動はどうせやるなら、楽しくだよ!きぬちゃん!」と話す姿に、坂下(ばんげ)町在住の沢井さんを、私は「坂下の藤樹さん=坂藤さん=ばんとうさん」とお呼びしています。入会して日は浅いのですが、私は先輩の皆様の藤樹学への思いをお聞きする度に、教育現場で活躍された方々、市民の生活向上を目指すお仕事に長きにわたり携わってこられた皆様とのお話や、旅に出て具体的に藤樹先生の足跡をたどる中で、改めて認識させられたのは、今の時代に藤樹学の教えは、「今こそ必要であり」新しい価値観も大切ですが、先人の残した決して古くはない、いや人間にとって忘れてはならない人としての基本的道徳を、今一度呼び戻すチャンスが来たと感じました。

近江聖人中江藤樹記念館長・中江彰編「中江藤樹のことば一素読用」からの引用。

1 姑息の愛「親の子を慈愛するには、道芸をおしえて、子の才徳を成就するのを本とす。当座の苦勞をいたわりて、子のねがいのままに育てぬるを、姑息の愛と云い、姑息の愛をば、舐犢の愛とて牛の子をそだつるにたとえたり」。

この『翁問答』を読んで、私は正直理解できませんでした。その解説文があり、読み進めました。この「愛敬の教育」を読みながら、私は聖書の箴言6章の父の論の一節を思い出しました。それは、箴言6章20～23節「わが子よ、父の戒めを守れ、母の教えをおろそかにするな。それをあなたの心に結び付け首に巻き付けよ。それはあなたの歩みを導きあなたが横たわる時見守り、目覚めれば話しかける。戒めは灯、教えは光、懲らしめや、論は命の道」を思い出しました。四国にて、堀井先生から「藤樹先生はどの宗教をも受け入れ、陽明学の教える、人を尊ぶ教えに、藤樹はやがて道徳の真髄を見出し、語るだけでなく実践へと身を置いた生き方の手本になったと聴き、感動しました。先ずこの自分自身が藤樹学に学び、咀嚼された言葉を感動して嚙下できるようになること。感動は伝染すると聞きました。ゆえに先ずは自分が喜んで学び生きている姿が人を引きつけ、相手も興味と関心を持つ事が、藤樹学を広める事なのではと考えます。沢井さんの、「やるならなんでも楽しく!」の姿勢が藤樹学を継承してきた生き方の一つだと感じて、近い内に清座の学び会開催をお願いしているところ です。

Ⅲ. これからの世代に伝えたい言葉

司会

はい、ありがとうございます。まずは鈴木様から、これからの世代に伝えたいこと、必ず伝えたいということをお持ちでしょうか。

鈴木

子供の教育で大事なものは、自分が生まれ育った地域の文化や歴史に誇りを持って、その良さを理解して生きていくことであると思います。そう考えたときに、その一つとして、やはり藤樹学の教えがある。喜多方の先人が苦勞を重ねて時間をかけて、努力を積み重ねてきた。その教えを子供達に教えたいと思います。中江藤樹はご存知のように、日本を代表する偉人の一人ですから、世界に出しても恥じない立派な人です。そういう意味では、中江藤樹の生き方、藤樹学の教えは現代風に捉えて教える機会があれば幸いかなと思いました。そこで子供たちのために教員委員会が副読本を作成しました。私たち藤の樹会は原稿執筆等で協力したもので、学校で内容を紐解いて、具体的に膝と膝をつきあわせ、学び話し合われ、深めることを期待しています。

司会

9月に副読本をいただきました。また教育委員会のアンケートによれば、子供たちにも内容が伝わっているとのことでした。将来が楽しみです。

鈴木

ただ残念なことに現場の先生に会うと、その姿勢が薄れているのではと感ずることがあります。藤の樹会の出番だと考えています。教育委員会の皆さんに本気になって取り組んでもらうとありがたいです。また喜多方市役所全体でもその意識を高めていただきたい。

司会

愛媛県大洲市では、小学校の高学年から藤樹学を学んでいるそうです。何らかの仕組みとして学びやすい形にすることも大事ですね。喜多方市教育委員会も人づくりの指針にしており、目に見える形になると、当然現場の先生も意識が変わってくるでしょうし。これからの課題ですね。

ありがとうございます。菅井様、いかがですか。

菅井

これからの世代に伝えたい言葉ではないのですが、日本には藤樹学の聖地が三つあります。高島市、大洲市、そして喜多方市です。喜多方市が付け加えられるのは、こそばゆい感じがします。これを知らない人はあまりにも多い。喜多方が江戸時代270年前近くに栄えたのは、なぜか。当時の喜多方市には商人や農民を中心にした自由闊達な風土があったと思われます。そこで文化が大きく育ってきた。喜多方の塩川は、新潟から船が到着した。それからいろんな街道が集まり、短歌や俳句が意外と昔から盛んで、いまでも奉納されてあちこちのお寺さんの石碑などにも刻まれ、文化も発展していた。そういう自由闊達なところがあったことが、藤樹学が栄えた所以ではないか。2006年の喜多方市の合併から10年間ほど、市民憲章がなかった。そこで令和2（2020）年の市民憲章作成に携わった時もやっぱり基本は藤樹学でした。「敬愛の心で支え合い 思いやりあふれるまちをつくりましょう」、「交流の輪を広げ 人を育て 誇りと自信をもって歩みましょう」という文言を入れさせてもらいました。喜多方の風土があって交流が盛んになってきたという背景があります。これからもっと知っていただきたいのは、一昨年、高島市を訪問した時に、まちがすごく綺麗だった。喜多方に戻った時、水が美味しいという割に、川が汚いと感じた。自分たちは先人の築いたものをもっと大事にするべきではないかと気づきました。

司会

ありがとうございました。若松との違いなどもありましたが、藤樹学は、子供も含めて自分たちで考えることが基本です。例えば商売ですと、予測してものを仕入れて売るわけです。まさに自由は、自立でもあり、ある意味では責任を伴うわけです。その責任があって、高島市はまちをきれいにすることが根付いていると思います。綺麗な理由は何かといえば、やはり自分たちで清掃してるから綺麗になるわけです。目に見える成果ですね。沢井様、いかがですか。

沢井

藤樹学では「良知に到る」（致良知 ちりょうち）という言葉が、あります。人の一生はその一言に尽きる。ただしその心を曇らせないで、生涯、磨きをかけていく。その内容を含めて噛み砕いて伝えていきたいと思う。

司会

ありがとうございます。新田様いかがですか。

新田

淵岡山（ふちこうざん）先生からずっと培われてきた会津の精神、藤樹学を議論し、解釈して議論してきました。ほかの地域ではなく喜多方独自に学問を発展させたという評価がまだまだ足りません。これを引き継ぐ我々が凡人でいいのか、問われています。全部が輝かないとダメではないか。何を持って行動するのか、学んだことが跳ね返ってきます。その評価を満足できるような形にしていきたい。喜多方市の輝くものとして光を当てないと意味がありません。喜多方市が藤樹学というこの財産をどのように磨きをかけるのか？藤樹学を子供たちに、鏡のように磨いて渡すことが大事です。それができるのかできないのかを人として問われている。立派な学問として後世に残せるのかどうかこ

の一点です。

司会

実践しようとする、ぶつかることが多くなりますよね。ありがとうございます。小荒井様。

小荒井

米沢の直江兼統の兜の様に「愛」を伝えたいですね。沢井さんに「知行合一（ちこうごういつ）」という言葉に分かりやすく日常に生かす考え方をお聞きました。そこで四国から帰り、（公財）新教育者連盟の子供のための伝記シリーズ1『中江藤樹』を10冊買い求め、小中学校に配布したいと思っています。昔、精神療法に森田療法を学んだ事も思い出します。行動療法。考えて熟慮も大切ですし、聞いて思っただけで終わりにする生き方も楽ですが、そこからはなにも生まれないと思い、前に何冊か本を学校に寄贈したことを思い出しました。知行合一の言葉から背を押された思いで注文したのです。今の時代、社会全体はもとより学校でも子供の問題だけでなく、保護者、教師も病んでいる状況は多く聞きます。問題解決に向け、専門の方々の理論や調査研究の対応策はあるのですが、現実には困難を極める問題が山積みなのはと危惧する話に心が痛みます。改めて藤樹学は世代全部に副作用の出ない教えだといえると思います。藤樹先生の教えは、相手を思う「愛」だからです。愛の生き方の相乗効果は人を成長させ、平和を作り出すと考えます。まずは先に知った者が教えに感動し、そのエネルギーを自分の大切な人に注いでいく生き方ができたなら、藤樹の教えはさらに喜多方に広がる。藤樹の愛の行動の教えが、喜多方山都に育った蓮沼門三先生、瓜生岩子さんを産んだこの喜多方の歴史、そう思うと昔も今も根底に脈々と何かが繋がって喜多方もまだまだ大丈夫だとの希望（来望）があるとワクワクします。まずは自分から始めたいと、清座の学びが楽しみです。生涯学習課の皆様にも中江藤樹の絵本をプレゼントいたします。是非一緒に藤樹学を学びましょうとお誘います。

司会

今、小学校、中学校の教員には、病んでらっしゃる方が少なくないと感じています。

佐藤参事

先生のなり手がいないことがあります。少子化の関係で子供は年々少なくなっていますが、喜多方市でも不登校児童生徒が年々増えてきていて、これってどういうことなんだろうと。もちろん我々も藤樹学の教え、「人づくりの指針」を作って児童生徒に伝えています。けれども今の時代その人間関係、人間形成、コミュニケーション能力が低い親、子供が多い。それを解決していくには、教育委員会はもちろん学校側と連携して、いろんな教えを子供たちに学んでいただくのももちろん大切なことです。けれどもパンフレットにあるように本当に簡単なこと、「なかよくたくましく生きる」、これだけなんです。「人を思いやり敬います」「こんにちは」「どうぞ」「ありがとう」。これだけです。これを言えない子供、親。市役所の中でも先輩同僚に挨拶もしない職員がいます。それではだめだと思うのです。まず朝が来たら、人に会ったら「おはよう」。それって一番大切なことです。昔々のことで大変恐縮ですが、私が市役所に入庁した時の係長が沢井さんです。人を思いやるというのは、先輩・後輩に関わらずそういったことが重要なのではないかと。不登校や引きこもりという対象の方にもつながるのかなと思います。今の時代は難しいです。家庭にもあまり踏み込めなくなり、ちょっと悩ましいです。

IV. 自由意見

司会

それでは四番目の自由意見です。藤樹学を学んでいる藤の樹会様と教育現場に関わっている市の教育委員会、各々立場があり理想を実践しようと思っても、様々な課題が間に入ってくるわけです。そ

こをいかに解決してくか。最終的には市民参加ということで、教えを広めていき、親も含めて市の教育委員会をバックアップするくらいでないと、教育委員会だけに任せると大変ですよ。ここからは自由意見ということでお話しください。

佐藤参事

我々生涯学習課では、「人づくりの指針」の推進会議をやっています。菅井さんにこの会長になっていただき、「人づくりの指針」をどう後世に残していくか、よりよいものにしていくかという形で会議を行っています。昨日の会議でも委員の皆様から意見を頂戴しました。推進会議の中で、今までこのパンフレットは偉人の考え方とかこの指針のこのみ触れていたのですが、菅井会長の提案もあり、昨年度リニューアルしました。児童生徒がこの指針を見て、自分のめあて・目標を立てて実際に振り返る。例えば、資料の3ページ4ページに「人を思いやり、敬います、お年寄りや弱い立場の人を労わります」とあります。こういったことが実際に実践できたのかどうかその辺も振り返るという形です。こういうことを自分で計画を立てて、実際にできたかどうかを学校で振り返る。一年間こういう計画を立て、できたよっていう形が家庭でもできれば、それこそ親子のコミュニケーションにもつながります。そのようにしていきたいと推進会議の中で意見があり、昨年度からめあてと振り返りを追記して、子供たちにこの指針を広めている状況です。

司会

個人的に中学生の時、夏、冬、春という長期休みの際に指針（タイムスケジュール）を自分で計画してやりなさいというのを出されたことを思い出しました。長期休みのたびに結構分厚いノートで毎日計画を立てなさいというものでした。子供たちのことを思うなら、たとえ嫌がられようとも、くどいぐらい言った方が良いのかもしれません。一回だけだとすぐ忘れてしまいますよね。

皆さんご自由にご発言いただければと思います。

新田

年齢に関係なく、大人でも余裕がない、結局家の中で子供にあたる、お年寄りにあたる。どういう環境かを考えないと解明できない。戦後は終身雇用が当たり前だったが、小泉内閣では、いつでも労働者を解雇できると決めた。それで安定した収入や安定した生活設計ができなくなった。それにより家庭の中に常にストレスが溜まった。公務員の場合、また違った意味で自分の足元はいつ崩れるかわからないと叩かれる。それが日本全国、金太郎飴のように北海道から沖縄までみんな同じようなリスクのグローバル化という市場原理に巻き込まれ、安定した生活がしにくい。それから自分の得意技を発揮できなくなっており、そういう不安から家庭不和、離婚、暴力、子殺しという「悪循環」がどんどん広まっていった。国づくりは人づくりというが、日本を幸せにするのは、政治に思いやりがなくなった時点から、国民のストレスが蔓延して来た。そうかと言って政治のせいだけにするわけにはいかない。個人の幸せを個人で発見する力を養う。このはざまで多くの国民がある意味犠牲となっている。それを精神的に救われるものは何なのか。親子が仲良く暮らせる、子供が幸せに生きられる地域に誰ができるのか。その中心たるエネルギーが必要です。こういうふうに各地域に全うに生きる人間を育てる。それは藤樹学が本来求めるものであるのかどうか。藤樹学だから救われるのかどうかわかりませんが。人として生まれてきて幸せに生きられない。世界中と比べたら日本人は幸せなのかもしれないが、学校教育も崩壊しているのではないか。みんな病んでいるのではないか。どうしたら病まないで暮らせるのか。ひとりひとりが幸福に暮らしたいと思った時、藤樹学の教えが参考になればいいのかなと考えている。

司会

小泉改革が始まる時にある経営者団体の講師に呼ばれました。ご指摘のとおり、当時言われたのは、人件費を固定費から変動費にするという話です。それは不安定雇用にして行くという話なので、それではもう社会がダメになるといったら、結局そうなったのが今の社会です。今日午前中、喜多方市立図書館で『喜多方地区労運動史』を閲覧しました。地元の八七タクシーという会社でも労働争

議を行なっていました。昭和電工ができてすごかったのは、昭和電工労組が戦後初の喜多方メーデー、そして地区労の中心だったのです。今の喜多方の観光都市づくりを実践してきたのは行政だけではなくて、民間事業者を含む市民の力です。いかに仲間を増やしていくのかが実践的になります。その時にキリスト教の教会の皆さんも含めて、色んな集団に働きかけをしていくということが最後には求められてくるので、結構忙しくなりますよね。今お話しがあったようにみんな個人としてバラバラに分断されています。そこで藤樹学の教えを元にすれば、それほど政治的な話にならないと思います。社会教育も大事です。喜多方ではNPO活動も盛んです。「(一社)塩川なまずの里の会」など、比較的新しい組織が作られており、インタビューしました。新興住宅地の御殿場では人口が増えているのも追い風になるのではないのでしょうか。ただし今は運動が少ないですね。合理化により労働運動も押し捲られていますね。

沢井

昭和30年ぐらいに公害問題がクローズアップされました。昭和電工の煙害です。

司会

明治以来、喜多方は桑の栽培と製糸が成長しました。会陽製糸という会社がありました。その工場が煙害によりダメージを受けました。そもそも昭和電工は、喜多方市となる前の喜多方町の時代に誘致しています。良かれと思って誘致したのに思わぬ結果につながりました。もちろん昭和電工労働組合が作られたことで、地域への社会的成果もあります。たしか1950年頃、喜多方の工業生産額ではアルミニウムが首位、第二位が日本酒、そして三位は製糸でした。しかし昭和電工の煙害により、桑がダメージを受け、結果として生糸がダメになります。良かれと思って工場誘致をしたものの、それまで第三位であった製糸業を壊滅させ、その後結局、昭和電工喜多方工場は縮小します。長い目で見たことが大事かもしれません。他に皆さんいかがですか。せっかくの藤樹学を議論する機会です。

小荒井

今の沢井さんの昭和30年位の昭和電工の煙害、公害問題に関する話を、数日前に94歳のお年寄りから聞きました！そのSさんは新町の集落にお住まいで、当時自宅に蚕を飼っていました。普段着物を入れる筆筒の引き出しも、時期になると蚕の寝床に使われたようです。ある日蚕がみな死んでしまいました。Sさんの母親はSさんに「お前が樟脳を入れた筆筒を使っていたから、その樟脳のせいで蚕様が死んだのだ！」ときつく言われ、その時、自分のせいで蚕が死に、家に損害を与えたのだと、苦しんだそうです。近所のおばちゃんに泣きついたら、そのおばちゃんにも、かばうどころか、責められて、ものすごく傷ついた。Sさんいわく「おれはせづなく泣いだがら！あの頃筆筒に樟脳を入れて、着物を虫に食わんに様にするの流行っていたのよ。しかし次の年も蚕様が死んだのよ！」。翌年、筆筒の引き出しに樟脳を入れずに、蚕を入れても、蚕は死んだのでした！後でわかったのは、昭和電工の煙が新町の山にぶつかりその有毒な煙が蚕のえさの桑の葉に降りかかり、その桑の葉を食べた蚕が死んだという話でした。それまで昭和電工煙害の話を知りませんでした。私は昭和33年生まれです。昭和電工煙害問題の話をよく知らない私が数日前に聞いた話題を今また聞くとはい！ビックリしました。そしてまた驚くのは、会津から遠い弘前にお住まいの佐々木先生が、喜多方に住む私達より喜多方に詳しく、文献を調べ研究し、さらに知ろうとされているのが素晴らしいことで、嬉しくありがたいですね～灯台下暗しで、私より下の年代の人々が、どれだけ煙害・公害問題を知っているのか？その様に語り継ぐことの大切さも学んだ今、座談会で新たに北方の藤樹学にスポットを当ててくださったこの企画に感謝いたします。外からの刺激に背中を押してもらい、さらに学ぶエネルギーをもらった気がします。

司会

冒頭のごあいさつで申し上げましたが、私は2007年1月に四国の高知に行きました。大洲のある愛媛県の隣です。今は店舗数を縮小しましたが、JR四国の関連会社が喜多方ラーメンの店を経営しており、高知駅に喜多方ラーメンの店があったのです。その約1週間後に喜多方市役所に行きました。

当時の観光交流課長・五十嵐さんは、熱っぽく喜多方と会津若松は違うという話をされていました。その延長線上に、喜多方レトロ横丁などの観光も比較的成功していると思われます。喜多方の観光には大手の資本が入っていません。地元中心にやってきているのが喜多方の強みだと思います。江戸時代に入る前から小荒井や小田付では定期的に「市（いち）」が開かれ、次第に商人が増えていきます。そこは武士が中心の城下町とは違う、そういう土台があり企業家を育成してきたのが喜多方だと考え、調べています。どうしても城下町は、堅苦しくなりがちです。だけど喜多方はさきほどの昭和電工が縮小する時に、ちょうど軌を一にするかのように、金田実さんが蔵の写真展を始めていき、地域の蔵が観光資源になり、やがて喜多方老麺会ができ、今は蔵とラーメンのまち喜多方ですね。喜多方は、とても強いまちです。そこはもっと自信を持っていいと思います。例えば、そばやラーメンも一緒に担当している観光交流課に藤樹学の議論に入ってもらうのも面白いと思います。以前、観察しましたが、喜多方は高校生がデートでラーメンを食べるまちです。

お話がだいぶ外れてしまいました。せっかくですから藤の樹会をどう広げていくか。新しいメンバー、まさに小荒井さんが近年入っていらっしゃったということです。活動を広げていくことは大事です。いかがですか活動を広げることは。なぜ新しい方々が入ってらっしゃったのですか。

沢井

コロナが落ち着いてから5,6人入会しました。現在、会員は36人です。いろんな事業やっています。その中で清座もそうですけど、それをきっかけに加入された方もいます。多くの講演の中でも、加入の呼びかけをしています。市役所の職員の方は6人おりますが、みんな仕事が忙しくて、色んな行事とかにより、自分が参加できないというのが現状です。ワンクッション置いて活躍していただくとかでしょうか。年会費は、3,000円です。

司会

一昨年に樟山様にご紹介いただいたAPJ（アイズピーナッツジャパン。旧おくや）の経営者・松崎さんは比較的若い方です。その松崎さんが、喜多方の藤樹学のお話しをされていました。知っている人はいらっしゃるの、その思いを大事にできればと思います。そのクッションというか、入り口が大事ですね。例えばすごくわかりやすく。一口藤の樹会会員とか、例えば500円払うとシールもらえるとかなですね。それを車にペタって貼っておいて、ああ藤の樹会のメンバーは結構多いんだとかですね。その大衆性を持たないと運動は広がらないと思います。あまり難しいことばかりやっていると、なかなか人は集まらないでしょうね。

沢井

藤樹学が一番盛んなころ、会津では喜多方中心に1,000人ぐらいの方が藤樹学を学んでいたんです。江戸時代から200年余続いているわけです。あちこちのお寺や庄屋さんで勉強会をしていました。そこに各々のチームのリーダー役がいました。その方がお話しをして、各地区を回って、組織的だった。淵岡山さんが、仙台の実家に帰る途中、喜多方に寄ったんですよ。喜多方では、その記念講演もおこなったようです。

司会

9月、沢井さんに墓地公園まで連れて行っていただきました。こちらは文化遺産としても観光資産としても活用できるでしょう。あるものをしっかり活用していくことが大事です。本来の姿で、単なる観光資源だけではなく、喜多方の一つの心の支えですね。それがあれだけ立派な墓地公園として残っているのです。これを史跡に指定するのは大変でしょうけれど、そうできなくてもしっかりと看板を作るなり、そうして隣接地は普通の市民墓地なので、市民の方が墓地に行くたびに、実はここに北方藤樹学の先人が祀られているとしてもいいのではないのでしょうか。

沢井

あれは何か形にできればいいんですけど、喜多方市の予算の関係もあったり、市としての評価ですね。どこまで評価するか費用対効果もあるでしょう。

司会

それは市民のクラウドファンディング、あるいは喜多方市のふるさと納税で「藤樹学応援」という項目を作っても良いのではないのでしょうか。看板ひとつ作るのにそれほど費用はかかりませんよね。それが市民の目につくところにあるとよいのではないですか。

新田

でもあれだけの規模の墓地、京都に行きましたけどありませんよ。

菅井

長年林の中にあっただけで、今片付けてもお墓の文字などが見えなくなりつつあるのです。

新田

亡くなった藤樹学を学んだ人が、一緒に亡くなった方がいるのです。年代が何代もずれているのです。そのお墓が集中して、先ほどの清座のリーダー的な中心人物。そういう方々のお墓があります。

小荒井

上ノ山に中江藤樹先生の教えに生きようとした先人達のお墓が集まった墓地があり、昨日駐車場からでしたが、今日のことを思い、手を合わせてきました。写真を見て下さい。

沢井

実は聖地なので皆さんがご利益に授かりたくてお墓を削り、持ち帰りして漢方薬のように用いたようです。市議会に予算出しても大丈夫ではないですか。「良知会」という市議会の会派がありますしね。

菅井

私がすごく感じているのは、いろんなところでお話しする機会があるので、中江藤樹っていう人の名前とか藤樹学は、結構知ってる方が増えて来ているような感じです。その中で私がもっと勉強しなくてはならないと思ったのは、例えば性善説ですが、朱子学は性悪説でしょ。だからあちらは型にぎっちり、年功序列とかやっているとの誤解があります。心をどう捉えるかが問題なんですが、その方々を説得するだけの器量をまだ持っていないので、その辺も勉強しなくちゃならない。たしか朱子学も、陽明学も藤樹学もそもそもは性善説ですね。もともとはね。ですが言葉はわかっているけど、中身に入っちゃうと誤解も結構ある。知行合一についても、藤樹学は実践が優先なんですよ。だから行動がまずあって、との誤解が一人歩きしている。それだけこうなんだよっていうようなことを説得できる力を私たちが持っていないと中々これから広げていく事は難しい。あわせて先ほど新田さんから今のいろんな社会の問題が出ましたけど、人づくりの指針の中に家庭教育のことを取り入れたんです。これはその前、沢井さんたちが作った時の形ではなかったことなんです。この項目つまり家庭が一番の基本。これが今ちょっとおろそかになっているということで始めたんですが、今問題はそれ以前で、北塩原村では今年生まれた赤ちゃんがひとりだけ。周辺のかつての五市町村の喜多方市以外は、二桁行くのはまだいい方なんです。日本の中で、ここも例外ではないという状況に入っているんで、本当にもっとこう新たな別の視点って言いますか、ただこう広めるってじゃなくて、新しい価値を見つけてそこで伝えていかなくはいけないのではないのか。その中で私たちが責任ある行動をどうするかっていうのが、問われているのかなっていう形で自問自答しています。

司会

今回の原稿は、弘前大学の紀要に掲載し、インターネット上ではPDFとしてご覧いただけます。全国の皆さんがPCなどで「北方藤樹学」と検索すると、そこにヒットすると思います。また問い合わせ窓口は、ご協力いただいた喜多方市教育委員会生涯学習課といたします。

新田

人の幸せをいかに追求するか。己の幸せも追求するけれど、藤樹学は人々が幸せになることを追求する学問ではないかという意味で、世界でも通用するんですよ。世界の食糧問題、厳しい戦争のある人々の幸せになっていくことができる意味でのメッセージ性がすごく高い。これは我々がやらなければ。首長がそういう意識がないので、市民にも発信力のない、ただ文化財として残るだけでは意味が

ない。市職員も一致してないとだめなんですね。喜多方市を引っ張っていく職員も含めて考える。日本一素晴らしいところだって言ってもらって当たり前。生活は質素儉約ですが、日本一豊かな喜多方は、まあ雪国で生活は大変かもしれないが、心が豊かなんだけど一緒に暮らしてくださいとかみんな笑顔で暮らせるというそんな理想を感じて持たないと人が寄ってこないのではないかな。単なる人づくり、教育委員会だけではなくて。いかに世界一の喜び多いまちにするか。

沢井

北京大学に本部がある「国際中江藤樹思想学会」に、喜多方の藤の樹会に入って欲しいという要請がありました。理事長は、中江彰さんです（コロナ禍で活動休止中）。

鈴木

人づくりの指針は立派なものでね、これはどちらかっていうと言葉をならべたものですから、具体性がありません。当然ですよ。人づくりの指針について二度ほど社会教育関係の団体から呼ばれて話したことがあるんですが、どなたもなるほどって思っただけで、それ以上には具体化されないんです。だから指針に基づく実話や、これに通じる実践例というか、具体例を豊富にやっぱり私たちが持つ必要があるのではないかと考えています。ならべてある言葉は立派ですからなるほどと思うけど、どうしても観念なんですよ。大切なのは具体なんだと思います。だから経験をとおしてやっぱり具体例を豊富に手元に持って、そしてこれに帰るように話を収束して行かないと響かないんじゃないかな。そんな感じを思っています。

司会

例えば、喜多方市の学校の感想文コンクールなどで藤樹学関係にふれているのですか。

佐藤参事

本当に先人がやってきたことを学校で先生が教えて、それを子供たちなりに真似する。各地区公民館でも「人づくりの指針」に基づいた講座をやっています。そこにも地域の方々や地区の子供たちも一緒に参加して、例えば瓜生岩子さんでしたら、水飴づくり。地域の人たちと子供たちが、さつまいもから育ててそれを水飴にしてという、作付から収穫、それからものづくりまで一緒にやるという取り組みをやっている地域もあるんです。一つ一つやっていることは大したことではないかもしれないですけども、先人がやってきたことを真似することで、地域の方々との繋がりもできてくるんじゃないかと思っています。今はネット上で、二次元バーコードで見することもできます。

司会

さつまいもから水飴にするなら面白そうですね。その辺のところをもっともっと掘り下げていって、その先に今度また新しいものができるかと思っています。2時間経ちました。皆さんありがとうございました。これから文字起こしした原稿をお送りいたしますので、ご校正をお願いします。これにて座談会は一段落させていただきます。どうもありがとうございました。お世話になりました。

(拍手)

図 「喜多方市人づくりの指針」（喜多方市WEBより）

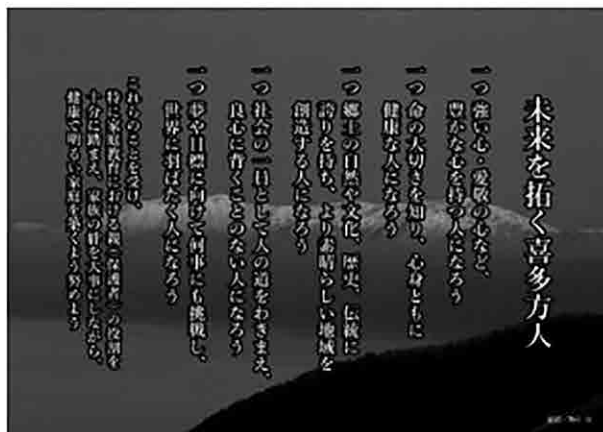
掲載日：2020年3月4日更新

喜多方市人づくりの指針とは

喜多方市では、人材の育成、青少年の健全育成などを目的とした「喜多方市人づくりの指針」を策定しました。

この指針は、かつて当地方にあって多くの住民が学んだ藤樹学の精神を生かすとともに、喜多方市生まれの瓜生岩子刀自、蓮沼門三氏ら先人や藤樹学の教えを尊重し、また、本市の置かれた風土や文化、歴史等を踏まえて策定されたもので、個性豊かな人間の創造を期待し、家庭や地域社会、学校そして行政など関係機関においてその実現を目指す努力目標とするものです。

指針の名称は、「未来を拓く（ひら）く喜多方人」とし、5つの努力目標を受け、児童生徒が目指すべき姿として、「なかよく たくましく 生きる」を示しています。



「謝辞」

今回の座談会では、喜多方市教育委員会の皆様大変お世話になった。特に記して、感謝の意を表したい。

* 「喜多方市人づくりの指針」 二次元バーコード

